

レジデンス・イン・森下スタジオ ヴィジティング・フェロー

マックス＝フィリップ・アッシュエンブレナー パブリックトーク

2011年7月18日(月・祝) 14:00－16:00

スピーカー マックス＝フィリップ・アッシュエンブレナー (Südpol、芸術監督)  
司会 久野敦子 (公益財団法人セゾン文化財団)

久野: こんにちは。本日は暑い中、ご来場くださりありがとうございます。それでは、マックス＝フィリップ・アッシュエンブレナーさんのパブリックトークを始めたいと思います。マックスさんは、セゾン文化財団で今年から始めましたヴィジティング・フェローというプログラムで来日していらっしゃいます。マックスさんの詳しいプロフィールは、皆様のお手元の資料をご覧ください。マックスさんは、ドイツご出身ですが、最近、スイスの劇場の芸術監督になられました。本日は最後の滞在日で、明日の朝早くお帰りになってしまうのですけれども、この2週間の滞在の間に、たくさんの方々の日本のアーティストの方々と会い、いろんな場所を訪問されました。

(以下、マックス＝フィリップ・アッシュエンブレナー)

本日はこのようなかたちでお招きいただきまして、本当にありがとうございます。非常に暑い中、お越しくださりありがとうございます。そして、この新しいプログラムに招いてくださり、ありがとうございます。

まず最初に、この場をお借りしまして、昨日、日本の女性の人たちが成功を収めた<sup>1</sup>ということで、お祝いの言葉を申し上げたいと思います。私の名前は、マックスと申しまして、先程、久野さんの方からも紹介がありました。7週間程前からスイスのルツェルンの劇場 Südpol で、芸術監督を務めており、プロダクションの演出を手掛けております。そのことについて少し触れて、そして、ヨーロッパとスイスにおける演劇のシステム、そして、私自身が芸術監督を務めている劇場についても、これからお話をしていきたいと思います。

先程の地図でもわかりますように、ヨーロッパの真ん中にスイスがあり、スイスの真ん中にルツェルンという都市があります。そして、その近くに(首都の)ベルンがあり、そして、ルツェルンの真ん中に、私自身が拠点を置いております Südpol があります。スイスのドイツ語圏の中でも最も南部にある都市で、それより南に行くとイタリア語圏、そして、西側に行くとフランス語圏、そして、それより東側に行こうとするとアルプスにさえぎられてしまうところです。

それでは、ヨーロッパにおけるスイスという大きな観点で少し詳しく説明していきたいと思います。昨今、ヨーロッパでは右翼の政党が選ばれるという傾向が非常に強まっております。そういった状況の最中、2つの大きな動向があります。1つ目は、多くの国で国境が閉鎖されるようになりました。例えば、デ

---

<sup>1</sup> ナデシコ・ジャパン、サッカー女子ワールドカップ優勝

ンマークの国境付近でコントロールが行われるようになりました。これはヨーロッパ全体の発想の概念からは反する動きとなっています。2つ目は、右翼の政党と関連しているプログラムへの影響なのですが、芸術活動に対する助成をするのではなく、それを消費したい人たちがお金を払うべきだという考えが強くなってきています。例えば、最近ですと、オランダで議論がありました、2013年には助成金を70%削減するということが話し合われています。

ヨーロッパ全体では、舞台芸術の活動は、助成金に依存する割合が非常に高かったのですが、このように、これからヨーロッパの多くの国々で、助成金が削減されるであろう状況の中で、どのような正しい解決策を見つけるのかという試練を迎えることになると思います。

私が芸術監督を務めております、Südpol について、後程、詳しく説明をしますが、その前にもう一つ、脇道にそれてしまいましたが、イギリスを除くヨーロッパ、そして、とりわけドイツにおける2つの大きな作品づくりの流れについてご説明したいと思います。

まず、一つ目は、シセシステム、例えば、ドイツシアターやパリのオペラ座、オリオン座、バルセロナオペラ劇場における作品づくりのシステムですが、すべて劇場でまかなっている工場生産のようなシステムで、俳優、制作、大道具、経理などすべてが劇場に存在します。そして、演出家とセットのデザイナーだけが、循環するというシステムです。各労働部門に基づくまるで工場生産のようなかたちだと、私は呼んでいるのですが、そういった生産のかたちのため、非常に力強い労働組合、そして、大きなヒエラルキーがあります。

もう一つの作品づくりなのですが、カンパニーを基盤にしたもので、つい最近、東京でも上演が行われた **She She POP** などが、一例として挙げられます。こういったカンパニーでは、プロジェクトごとに個人、もしくは、カンパニーをもとに作品をつくっていて、彼ら自身が資金を調達して、作品の制作も行っています。Südpol もその一例で、プロジェクトにもとづいて、創作の支援体制や構成もつくっていくというかたちのつくり方です。

両方のシステムは、さまざまな議論のもととなっているのですが、この2つのシステムは、ドイツ、そして、ヨーロッパ全体におきまして、80年代から同時に存在しているものです。そして、一つ共通する点は、より多い方がより良いという考え方です。私は、ベルギーの数字しか持っておりませんが、ここ10年の間に制作されたプロダクションの数は3倍に増えています。しかし、各プロダクションの公演回数は減っておりまして、以前は15回だったものが、4.3回まで落ちています。これは、助成金が削減されていることと関連していますが、そういった削減傾向の中で、どのように作品をつくっていけば良いのかという大きな課題があります。

スイスの右翼の政党のキャンペーンに使用されたグラフィックで、このイメージを見ると何が言いたいのか一目瞭然だと思えますが、この政党は、今年末には勝利する予定です。ルツェルンは、人口約7万人の都市で、その周辺都市を含めると約20万人の人口です。スイスで、一番大きい都市のチューリッヒまでは、電車で約40分のところにあり、また、チューリッヒの人口は、約75万人です。このルツェルンには、州立劇場がありまして、その他にも有名なジャン・ヌーベルが考案した **KKL** ビルなどもあり、このビル中には、2つの多目的ホールがあります。その他にも、2つの民間の劇場がありまして、そして、最近できた劇場が **Südpol** です。

Südpol は、約3年前の 2008 年 11 月にオープンしました。その中に、子どものための音楽学校、ワークショップの空間、そして、私自身が芸術監督を務めておりますパフォーミングアーツ・センターがあります。大ホールは、先程、写真にありましたけれども、座席の配置を変えることができ、400 人を収容することもあれば、900 人を収容することもでき、いろいろな公演やコンサートなどが開催されています。中ホールは、写真には座席は写っていませんでしたが、120 名まで収容することができます。そして、小ホールは、スタジオタイプの空間で、中ホールの約2分の1の広さです。それから、ビストロとレストランがあり、昼食を出したり、夜になりますと、バーとして機能し、そのバーでは公演なども行われています。それから、クラブがあるのですが、そこでは、パーティやコンサートなどが行われていて、250 名まで入ることができます。写真にはありませんでしたが、アパートがあり、レジデンスプログラムで滞在する人が宿泊するための場所として、10 名まで収容が可能です。そして、素敵な居間とキッチンがあり、非常に眺望が良くてアルプスを眺めることができます。田舎のど真ん中にあるにも関わらず、とても都会的なビルとスタイルがあるという相反するところが一つの特徴なのですが、もう一つお見せしました、葉書に書いてあるプログラムなんですけれども、これは、2つの公演を行うという **Saison N** というプログラムで、このプログラムを行うことによって、人口の2%に対して、コンサートを提供することができるということになっています。

総予算は、180 万スイスフランで、芸術的な創作に割り当てられる予算は、15 万スイスフランです。スタッフは 8 名いるのですが、全ての人がフルタイムではありませんし、65 名のフリーランスの人たちと組んで活動を行っています。Südpol の活動は、主に2つのラインがあります。まず、一つ目がクローズド・タイプ、いわゆる貸小屋として、お金を儲けるためで、私たちの空間を総会や会議などに貸し出しています。もう一つは、オープンタイプなんですけれども、コンサートなどの商業ベースのプログラムで構成されています。例えば、先程、写真で見ましたフリーマーケット、これは月に1回、実施されていて、かなり儲かります。今、ご覧になっていただいているのが、卓球のコンペティションで、これも月に1回、大ホールにて開催されていて、やはり、これも儲かるプロジェクトです。イベント終了後に、パーティが行われ、バーでもかなりのお金が入ってきます。

その次に、Südpol の主な活動であります芸術作品の創作と芸術的なプログラムがあり、これが一番の関心事であり、主に3つの要素で成り立っています。その一つ目の要素は、音楽、ダンス、演劇といったさまざまな分野にまたがった活動が、同じ目線で出会い、融合されるタイプのプログラムです。もう一つが、コカインのテクニクと呼んでいるもので、“ハイ”と“ロー”をつなげるという内容です。それは、芸術的な作品と商業ベースの作品は、もともとかけ離れているので、融合させるのではなく、なるべく分け隔て、後で繋げるとより面白いものが生まれるという発想がもとになっていて、スイスのど真ん中にある町で、地元の活動を行うことで、よりインターナショナルな作品になるという考えがベースになっています。そして、3つ目ですが、創作のスピードを落としていくということが考えのベースにあります。例えば、長期間に渡るレジデンスプログラムです。私は、このプログラムをビジネスカードプロダクションと呼んでおりまして、最初に過去に制作した作品を持って参加してもらって、2か月間の滞在でその作品を新しい作品へと作り直し、そして、その新しい作品を持って、いろんなツアーができるというものです。また、アーティスト同士のコラボレーションをもっと目に見えるかたちにするためのフォーマットで、スポーツでいうトリレーに例えることができると思うんですけれども、まず、A と B と C さんを招き、そして、A さんが滞

在し、その中に、DさんとEさんという新しいアーティストが加わり、DさんとEさんは別の作品に取り組み、それを共有するというリレー形式です。そういう新しいネットワークづくりのフォーマットを実現していければ良いなあと考えております。今回、日本に滞在している間にも、日本のアーティストがどのように互いに連携をしているのかも調査の対象にしていました。

ヴィクトル・セガレンという近代の初期に活躍した作家の言葉を引用したいと思います。「地上のある一点から去るということは、必ず、その地上の一点に近づくことを意味する。なぜならば、最初に始めた時点で、最大限の距離があったからだ。」という言葉です。ここで、昨日、スイスの新聞を読んでいて発見したことについて説明したいと思います。「今こそ、日本の国債を買うべきだ、なぜならば、値段が高騰したら爆発するからだ。」というものです。この原稿を書いているときに、遭遇しました。そして、もう一つ福島原発事故に関連した興味深い現象についてお話をしたいと思います。原発事故が起きてから、何週間も、スイスの新聞でもそのニュースでもちきりだったのですが、同時期にスイスでは、ベルテンベルク州の緑の政党が、初めて選挙に勝ちました。

そして、もう一つ、インパルス・フェスティバルで賞を獲得した作品についてお話をしたいと思います。これは、競争形式のフェスティバルで、2年に1度開催されます。ドイツ語圏以外の国々で制作された優れた公演を見られる場として知られています。この作品について3つの面白いポイントがあります。まず、これは、スイスとフィンランドの共同制作で、ベルリンで制作され、ドイツ語で上演されました。そして、全体の制作の期間は、2年半だったのですが、その期間、様々なかたちで上演されました。そのフォーマットも、シンポジウム、ボンテージに関するワークショップなどがありました。なぜ、そのようなワークショップをしたかという点、ロマンスにおける境界線も探究していたからです。一週間前にこのフェスティバルが開催され、その勝者も発表されたのですが、コンテストに勝ったカンパニーの4つのうち、3つのカンパニーは、ドイツ語圏以外のカンパニーでした。それは、いいことだと思います。私、個人は、非常に嬉しいことに思いました。

最後に、私の方からみなさんに対して、問いかけをしていきたいと思います。今、説明をしたように、ドイツでは、右翼が台頭しつつ、それが演劇活動にも影響があるわけですが、しかし、むしろ、いいかたちで作品に成果が表れているかだと思います。日本のパフォーミングアーツの現状ですけれども、今、国際化という観点から考えると、どのような状態であるかということと、今後、どのような方向に向かっていくかということを教えていただければと思います。もう一つの質問ですが、行政制度の中では絶対不可能である2年間かけて作品をつくるということに関して、みなさんがどのように捉えているかということについてです。私からの話はこれで終わらせていただきたいと思います。今日、お話した内容が少しでも、みなさんの役に立てば良いなと思います。

(以下、質疑応答省略)